

まんじゅうこわい

十人よれば気は十色ということをもうします。

人間は顔かたちのちがうように、お気性もちがいます。

最も、それぞれ心持ちがちがうからよろしいので・・・はやいはなしが、ここにおいでのお客さまがたが、みんなおなじ心持ちだということになるとたいへんで・・・おひとりかはばかりへお立ちになると、みんなあとからぞろぞろいつてしまふなんてのはこまるものですからな。

「さあ、さあ、みんなこっちへあがってくれ。入り口に立っていると、あとの者がつかえてはくれねえから、ずっとはいつてくれ。ざぶとんは三枚しかねえから、うらみっこなしにみんななしにしよう。」

「ええ、こんちわ」

「こんちわあ」

「よう、こんちわ」

「みんなあがってくれたかい」

「ああ、あがったけれど、いつたいなにがあつたのだい？」

「なにがってほどのことはねえけれど、じつは、おれの誕生日なんだ」

「たんじょうび？なんだい、それは？」

「おれがうまれた日だよ」

「うまれた？おめえが？・・・うそだろう」

「うそじゃないよ。うまれたんだよ、二十六年前に・・・」

「でも、ぼうふらなんか、どぶのなかからわいてくるぜ」

「ぼうふらなんかといっしょにするなよ」

「まあ、いいじゃねえか、そんなことは・・・で、どうなるんだい、おれたちをよんでおいて・・・一ぱいやろうっていうのかい？」

「はじめはそのつもりだったんだが、みんなけんかつ早いし、けがにんでもでたらこまるから、それで酒はやめちまったんだ」

「じゃあ、どうするんだい？」

「だから、酒はねえけれど、湯はたっぷりわかしてあるから、みんな好きだけ子どものはなしでもして、のどがかわいたら茶をのむという寸法なんだ」

「おやおや、からっ茶のんでむかしばなしかい、いろっぽくねえな」

「子どものころっていえば、留公は泣き虫だったな。ちよっとさわっただけで泣きだしちまって・・・」

「いまじゃつよくなつたぜ。障っても泣いたりしねえから・・・うそだとおもうならさわってみろ」

「ばか、いい若え者がさわつたぐらいでなくやつがあるものか」

「泣き虫といえど、金ちゃんはいやに臆病だったな。むやみにへびをこわがったりして・・・いまでもこわいかい？」

「ああ、へびときいただけでぞーっとしてくらあ」

「そうかい、そんなにこわいか」

「大きらいだ。へびをみると足が前にでないくらいだ」

「虫が好かねえってやつだな」

「まあ、うそかほんとか知らねえが、おふくろのはなしだと、な

んでも、胞衣を埋めたところを、いちばんさきに通つたものが虫が好かねえそうだな。だから、きっと金ちゃんの胞衣を埋めた上をへびが通つたんだな」

「いや、へびばかりじゃないね。うなぎも通つた。どじょうも通つた。みみずも通つた」

「ずいぶん通つたねえ、長いものばかり・・・」

「ああ、だからおれは長いものはみんなだめだ。食いものだって、そばがだめ、うどんがだめ・・・とにかく長いものはどうもいけない・・・だから、ふんどしもしめねえ」

「きたねえなあ、いくら長かつたって、ふんどしぐれえしめな

よ・・・それにしても、むしがすかねえつてのはふしぎなもんだ

そのとなりはなにがこわい？」

「おれは蛙だね」

「蛙なんかこわいわけはあるめえ」

「ところが蛙をみると、からだがすくくじまう」

「じゃあ、おめえの胞衣の上をいのちばんに蛙が通つたんだ」

「松ちゃんはなにがこわい？」

「おれはなめくじ」

「へびに蛙になめくじじゃあ虫拳だな」

「勘ちゃんはなにがこわい？」

「あり」

「あり？あんな小さな虫がかい？」

「ああ、ありがあつまると、なにかこそそと相談するようなかつこうをするだろう、あれがこわい」

「へーえ、かわつてるな、勝ちちゃんはなにがこわい？」

「馬だね」

「馬？馬なんか虫じゃねえじゃねえか」

「でも、こわいね、馬は・・・おれは、あのでっかい鼻の穴へすいこまれちまうかとおもうと、もう死にそうになっちまうんだ」

「ふーん、そんなもんかな・・・おい、熊さん、おめえは、さつきから、おれたちの顔をみながらたばこばっかりのんでいるが、いったいなにがこわい？」

「なにを！」

「なにがこわいんだよ」

「なにをぬかしやがるんだ、この動物めら」

「これはおそれいった。動物めらはひどいね」

「ひどいもくそもあるもんか。さつきからだまってきてりやあだらしねえじゃねえか。人間は万物の霊長とって、いちばんえれえんだぞ。それがなんだってんだ。へびがこわい、蛙がこわいだってやがら・・・人間やめちまえ・・・それに、ありがこわいとはなんてえやつだ。おれなんか、赤飯食うときに、ごまがないとなると、ごまのかわりにふりかけて食っちまわあ・・・もつとも、ごまがかけだしやがつてすこし食いにくいけれど・・・それに、くもがこわいと聞いてたな。だらしがねえじゃねえか。くもなんかどこがこわいんだ。おれんちじゃあ、なつとう食うときに、くもを二、三びきつかまえてきて、なつとのなかへほうりこんで、きゆうきゆうかきまわしちまうんだ。そうすると、なつとうが糸をひいてうめえことこの上なしだ。それに、義公は馬がこわいだと・・・べらぼうめ、馬なんかからだはでかいけれど、気

のちいさい動物だ、こわいことなんかあるもんか。それに、食ったって、桜肉とってうめえじゃねえか。四つ足なら、おれはなんでも食っちまうぞ。きのうも、おれは四つ足ならなんでも食うぜといばつたら、おどろいたね。こたつやぐらを持ってきやがった。さあ、四つ足だから食えというから、おれもまけずにいつてやった。おなじ四つ足でも、こういうあたるものは食わねえ」

「なんだい、とんだところでおとしばなしをやつてやがる。それにしても、つよいねえ。ほんとうにこわいものはないのかい？」

「こわいものなんかあるもんか。一つもないよ」

「かんがえたら、一つはぐらいあるだろう」

「うるせえな。ないといつたらないよ。まごまごすると、かたつぱしからはりたおすぞ」

「まあ、そうおこるなよ。みんなで子どものおもいだして、むかしばなしをしてあそぼうというんだ。そんなにとんがらかなよ。おめえだつて人間だ、なにかこわいものが・・・」

「しつっこいな。せつかくおれがおもいだすまいとおもつていたのに、とうとうおもいださせやがつて・・・そりゃあおれだつて、まるつきりこわいものがないわけじゃないよ。しかし、これをうっかりいうと、末代までの恥辱になるから・・・」

「いうことが大げさだよ。末代までの恥辱だなんて・・・いったいなにがこわいんだよ」

「いわないよ。それをいうと、おめえたちが笑うから・・・」

「笑わないよ」

「笑うよ」

「なに、笑うものか。なんだか白状しねえな」

「じつはね、おれはまんじゆうがこわい」

「まんじゆう？そんな虫がいたかな？」

「虫じゃないよ。食うまんじゆうだ」

「食うまんじゆう？うそだろう」

「ほんとうだよ」

「へーえ、まんじゆうがね・・・それじゃあ、まんじゆうが胞衣の上を通つたのかね」

「まんじゆうがあるくわけねえじゃねえか。まんじゆう持ったや

「つかなんか通ったんだろう」

「とにかく、おれは、まんじゅうをみると、ぞーっとなって、ふるえがとまらないんだ」

「すると唐まんじゅうなんか・・・」

「ああいうねだんの高いものは、いちばんこわいんだ」

「そうかねえ、そばまんじゅうなんぞは？」

「よせよ。人がこわいといってるのに・・・おれは気持ちが変わらなくなったからもう帰るよ」

「なるほど、顔の色がかわってきた。しかし、おい、お待ちよ。せっかくみんなあつまってるのに、おまえひとり帰っちゃったらさびしくていけねえ。どうだい、奥の六畳で一やすみしねえか。そのうちに気持ちがよくなるだろう」

「そうか。では、すこしのあいだ寝てみよう」

「いいとも、奥で寝ていなよ・・・どうだ。みんなこつちへよれよ。おかしなやつがいるじゃねえか。まんじゅうがこわいだってやがらあ・・・ところで、それについて相談だが、ひとつあいつをおどかしてやろうじゃねえか、さつきもさんざんくそいばりにいばったりしてしゃくにさわるから・・・どうだい、みんなで錢をだして、まんじゅうを買ってきて、あいつの寝ているまくらもとへずっとならべておいて、野郎をおこしてこわがらせようというのはどうだい？」

「おもしろいことはおもしろいけれどね・・・なにしろ、まんじゅうといきいただけで顔色がかわったぐらいだから、ほんものまんじゅうをみせたら死んじゃうよ」

「死んだっていいやな。生きてたって、どうせ国家のお役に立つというしろものじゃあるまいし・・・」

「でも、まんじゅうで殺すのはよくないよ」

「どうして？」

「まんじゅうで殺して暗（館）殺だなんて・・・」

「変なしゃれをいっているんじゃないよ。まあ、いざとなれば医者がある。さあ、まんじゅうを買ってこようじゃねえか」ということになって、みんなまんじゅうを買ってきました。

「さあ買ってきたぞ」

「なんだい、ものは？」

「そばまんじゅうだ」

「おい、おれも買ってきたぞ。財布ひっぱたいて・・・それ、唐まんじゅうだ」

「唐まんじゅうか、こいつはいいや。野郎は、これをいちばんこわがってやがった。あとは、勝ちゃんか、なんだい？おう、酒まんじゅうか。こいつはおつだ。留さんは？栗まんじゅうか・・・おあととは、くずまんじゅうか・・・そつちは？・・・中華まんじゅうか・・・さあ、さあ、このいちばん大きなお盆にのせて、野郎の寝ている枕もとにおこうじゃねえか・・・おれが、そうとおくからな。おつとつと、あとをしめちやいけないう。野郎をゆりおこしといて、おれがぱつとにげるんだから、にげそなたらたいへんなことになるんだよ。もしも野郎がこれを見て、あたまがおかしくなっちゃまって、おれのどぶえなんかへ食いついてみる、まんじゅうで暗（館）殺されるのはこつちになっちゃまうんだから・・・さあ、いいか、おこすよ・・・熊さん、熊さん、ちよいとおきてごらん・・・おきてごらんよ・・・おれは逃げるけれど・・・」

「え？・・・なんだい？・・・おう・・・おきるよ・・・あーあ、よく寝ちまった。このところ寝不足がつづいたもんだから、横になつたとたんに寝こんじまって・・・あーっ！まんじゅう！うわー、まんじゅうだ！たいへんだ、たいへんだ！たすけてくれ！」

「しめしめ、熊公のやつ、まんじゅうみてふるえてやがらあ。ああ、ありがてえ。いい気持ちだ。ざまあみやがれ」

「ああ、たいへんだ。こわい、こわい・・・おれがこわいっていうまんじゅうを、こんなにいっぱい枕もとにならべて、ああこわい、こわい・・・ああ、唐まんじゅう・・・こういう高いものは、こわいからまっさきに消えてもらわなくては・・・中は・・・わあ、いいあんこだな・・・こわい、こわい・・・ああ栗まんじゅう・・・うわあ、こわい、こわい、・・・わあ、そばまんじゅう・・・すこし古いとみえて、皮までこわい、こわい・・・」

と熊さんはまんじゅうを食べはじめました。

「おいおい、おまえだけのぞいて、ひとりでたのしんでちやいけ

ないよ。なかで、ずいぶんこわがってる声がするけど、まんじゅうみて、野郎、気でもおかしくなったんじゃねえのかい？」

「すこしよすがおかしいんだよ。野郎、こわい、こわいとふるえながら、まんじゅうを食ってるぜ。ほんとうに気でもちがったんじゃあ・・あつ、しまった。いっばい食っちゃった。いや、食っちゃったんじゃねえ・・食われちゃった。ばかにした野郎だぜ。やい、熊公、あんまりばかにするな！てめえ、こわいどころか、まんじゅうをむしやむしや食いやがって・・みんなもこっちへおはいりよ・・まったくずうずうしい野郎だ。てめえが、まんじゅうがこわいというから、みんな財布ひっぱたいて買ってくりやあ、いい気になって、むしやむしや食いやがって・・」

「ああ、こわい、こわい、こういうこわいものを、いつまでもこのままにしておいては、からだのためにならないから、・・・わあ、こわい、こわい、みんなたもとにしまつて、おれのうちへ持つていって処分しなければ・・わあ、こわい、こわい、なにか大きなふくろはないかい？たもとはもういっばいだ」

「あれ、みんな持つていくつもりだな。なんてまあずうずうしいんだ。ずうずうし学校卒業生のはてめえのことだ。それで、まんじゅうがこわいもないもんだ。やい、熊公、てめえがほんとうにこわいのは、いったいなんなんだ？」

「えへへ、このへんで、濃いお茶が一杯こわい」

恪気の火の玉

恪気は女のつつしむところ、痴気は男の苦しむところなんているが、恪気、つまりやきもちというの、やきかたというのがむずかしいようでございます。

やきはしやせんと女房いぶすなり

やくというほどではなくて、狐色ぐらいにいぶす嫉妬というものはかわいらしいものですし、

寝たなりでいるはきれいな恪気なり

夜中に帰ってきた亭主をでむかえもしなければ、着がえの手伝いもしないで、寝たままでいるのは、これもやきもちのせいなのですが、これも嫉妬としては性質のいいほうでございます。それが

恪気にも当たりである金だら

かんざしも逆手に持てばおそろしい

朝帰り命に別状ないばかり

なんてことになってくると、やきもちもだんだんとおそろしいことになってまいります。

浅草の花川戸に、立花屋という鼻緒問屋がございました。

ここの旦那がたいへんに堅いかたでございまして、女はわが女房のほかにまったく知らないという、まことに堅餅の焼きざまのような人物で・・この旦那が、あるとき、仲間の寄り合いのくずれで吉原へさそわれました。

さあ一度あそんでみると、その味をわすれることができせん。毎日のようになったのですが、もともと商人でございますから、そろばんをはじいてみてかんがえました。こんなことをしていたんでは、いくら財産があってもたまったもんじゃやない。なんとか安くすませる方法はないものか・・いろいろ思案した結果、おいらんを身請けして、根岸の里へ妾宅をかまえてかこいました。

いわゆる黒板塀に見越しの松というかまえて、お妻さんは狎を抱いて暮らしているというのがよくみる光景のようで・・狎を抱いていれば、ご当人がひきたちますからたいへんにお得ですが、

なかには狎を生んだんじやないかなんていう、狎と瓜二つなんてかたもおります。

で、旦那は、月のうち本宅に二十日、妾宅に十日お泊りになるようになりました。

本宅のほうでは、このごろ旦那のようすがおかしいといのでもしらべてみると、案の定、根岸に妾宅があるということがわかりましたから、本妻としてもおもしろくありません。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいまし」

「おいおい、おまえさんは女でしょ？もうすこししずかにあいさつできないのかい？　・・・　あーあ、くたびれた」

「ええ、そうでございます。おつかれでございますよ
よ・・・ふん」

「おい、おかしいことをいうね。おい、お茶をいれておくれ」

「あたくしがいれたお茶なんかおいしくございますまい。」ふん
「おい、どうでもいいけど、そのふんてのはおよしよ。感じがわるいよ。どうせ笑うなら、大きく、あはははと笑いなさい・・・

あー、腹がへった。めしを食おう。お茶づけにでもしておくれ」
「あたくしのお給仕なんかじゃあおいしくございますまい。ふん」

「いいかげんになさい」

旦那だって、これではおもしろくありませんから、プイととびだしてしまって、こんどは妾宅へ二十日、本宅へ十日とあべこべになってまいりますし、そのうちには、だんだん本宅へ帰らないようなことになってまいります。

さあ、こうなると、ご本妻のほうではおさまりません。こういうことになるのも、すべて根岸の女があればこそだ、あの女さえ亡き者にしてしまえば万事うまくいく・・・そうだ、あの女を祈り殺してしまおうというので、真夜中に、わら人形を杉の大木へ持っていくって、五寸釘でカチーン、カチーンと打ちつけはじめました。

このことが根岸のほうにも知れましたから、こちらでもだまっ
ちやあおりません。

「なんだって？あたしを五寸釘で祈り殺すんだって？なにいつて

るのさ、自分で旦那のごきげんがろくにとれないから、それで旦那がこっちへくるんじやないか。へん、そっちが五寸釘なら、こっちは六寸釘で行くよ・・・ばあや、すぐに六寸釘を買ってきておくれ」

てんで、根岸のお妻さんは六寸釘で、真夜中にカチーン、カチーンとのろいの祈り・・・

このことが、こんどはご本妻に知れましたからたいへんで・・・「なんだい？根岸が六寸釘で祈ってるって？よーし、そんならこっちは七寸釘だよ。すぐに七寸釘を買つといいで」

さあこうなると、おたがいに、八寸釘だ、九寸釘だと競争でいのりはじめました。

ところが、むかしからいう通り、人をのろわば穴二つとやらで、ご本妻もお妾も同じ日のおなじ時刻に亡くなるというさわぎ。

こうなると、まぬけな目にあつたのは旦那で、一ぺんにお葬式を二つもだすというあわただしさでございます。

「ええ、旦那さま」

「おや、番頭さんか。なにか用かい？」

「はい・・・その・・・旦那さまはご存知でございますか、あの評判を？」

「どんな評判だい？」

「毎晩真夜中になりますと、こちらのお宅から火の玉があがって根岸のほうへむかいますして、また、根岸のほうからも火の玉が花川戸めざしてとんでまいりますして、ちょうど大音寺前のところで、この火の玉がぶつかって、火花をちらして喧嘩をするということでございます」

「うん、あたしもちよいと耳にしたんだが、そんなに評判になっていたんでは、店ののれんにかかわるねえ、信用にかかわりますよ・・・どうしたらいいだろう？」

「さようでございますねえ・・・いかがでございますしょう。どちらの火の玉も、もとはといえは旦那をなかにはさんでの愠気もとでかつかとしているのですから、ここはひとつ、旦那さまがご仲裁なさるといふことでおおさめになつてはどんなもので？」

「うん、それはいいとこへ気がついた。さっそく今晚でかけましよう。おまえもいっしょにいっておくれ」

「かしこまりました」

さて、その晩おそく、旦那は、番頭を供につれて、浅草たんぼをななめに抜けて大音寺前へやってまいりました。

「旦那さま、さびしゅうございますね」

「ああそうだな．．．しかし、ただこうして待っているのも退屈なもんだな．．．えーと．．．」

「旦那さま、なにをしていらっしやいます？」

「いえね、いま、あたしはたばこが好いたいんだが、あいにく火道具をわすれてきてしまつて．．．番頭さん、ちよいと貸しておくれでないか」

「あいにくと、てまえはたばこをやりませんもので．．．」

「ああそうだった。おまえさんはたばこをやらなかつたね．．．どうもそうなると、意地のきたないもので、むしようにたばこが吸いたくなつちまつた」

はなしをしておりますに、根岸のほうからひとつの火の玉があがつたかとおもうと、フワフワフワフワ．．．こしらへむかつてやつてまいります。

「旦那さま、あれが根岸の火の玉で．．．」

「ああ、なるほど．．．おいおい、おーい、ここだよ」

旦那が声をかけますと、火の玉がぐるぐるすると三べんまわつてぴたりととまりました。

「や、ものすごいね。しかし、まあよくきてくれた。おまえのくるのを待つてました。で、おまえがでてる心持ちをよくわかつてるんだけど、なにしろ、あれこれと評判になつてこまるんだよ．．．はなしの途中だが、ちよいと待つておくれ。いま、あ

しやたばこが吸いたいんだが、火がなくてこまつてるんだ。ちよつとこつちへきておくれ。おまえの火でたばこをつけさせて．．．うん、うん、ついた、ついた。はあ、うまいねえ、ありがと

う．．．そこでね、おまえがでてることはおだやかでないんだよ。うちの家内はね、しろうとでわからずやだ。だから、どうし

てもおまえさんにつつかかるわけだが、そこはおまえさんは酸い

も甘いも心得てる苦勞人だ。なんとかうまく下手にでて、あれと仲直りをしておくれでないか。ねえ、なんとかうまくやつておくれ．．．もつとこつちへきて、もう一服つけさしておくれよ」

と、旦那がたばこを吸つておりますと、花川戸のほうから火の玉がぱつとあがつたかとおもうと、こつちは根岸の火の玉みたい

にフワフワなんてとんでまいりません。ビューンとうなりを生じてまっしぐら．．．

「旦那さま、旦那さま、あれがおかみさんの火の玉で．．．」

「いや、こりやあすごいね．．．おいおい、おーい、こつちだ、こつちだ」

とよびますと、ビューンと一直線にとんできた火の玉が、ぐるぐるぐるすると五、六ぺんもまわつてびたり。

「いや、よくきてくれた。おまえのくるのを待つてました。いま、根岸やつにもはなしをしたんだよ。すると、ようやくわかつてきて、ねえさん、まことに申しわけないって、そういつてわびて

るんだから、おまえさんもどうかきげんをなおして仲直りしてやつておくれ。でないと、あたしがこまるじやないか．．．だからね、いろいろはなしもあるけどもさ．．．すまないけど、ちよいとこつちへきておくれ。また、一服やりたくなつちまつた。あ

しがね、たばこを．．．」

と旦那がきせると持つてゆくと、ご本妻の火の玉がすーっとそ

れて、

「あたしの火じゃおいしくございますまい。ふん」

時そば

むかしは、二八そばというものがありまして、十六文であきな
いをしておりました。

なぜ二八そばかという、二八の十六で二八そばといったとい
うかたもおりますし、そば粉が八分で、うどん粉が二分だから、
そこで二八そばといったとかたもおります。

どちらがほんとうかわかりませんが、いずれにしても、最近で
はまったくみられなくなった商売で、よしずつぱりの箱の上
に屋根がついておりまして、屋根うらに風鈴がぶらさがっている
という、・・・ですから、「親ばかちゃんりん、そば屋の風鈴」と
いうことばがのこっております。

「そばーうーい、そばーうーい」

「おう、そば屋さん、なにができるんだい？え？花まきにしつぽ
くか？うん、そうか・・・じゃあしつぽくをこしらえてくんね
え・・・うーん、どうもさむいじゃないねえか」

「ええ、たいそう冷えこみますなあ」

「どうでえ、商売のほうは？なに？うん、ぱつとしねえか？運、
不運でしかたがねえや。まあ、そのうちにやいいこともあるさ。
あきねえとって、あきずにやるこつた」

「ありがとうございます。お客さんはうまいことをおっしゃいま
すねえ」

「あははは・・・ときに、この看板はかわつてるな。的に矢があ
たつてあたり屋か・・・正月早々あたり屋なんざあ、とんだお嬢
吉三で、こいつあ春から縁起がいいや・・・おれはね、そばが大
好きだから、この看板みたらまたくるぜ」

「ありがとうございます・・・ええ、どうもお待ちどうさま
で・・・」

「おう、もうできたかい、ばかに早えじゃねえか。こうじゃなく
つちやいけねえや。こちら江戸っ子だ。気がみじけえから、あ
つらえもののおせえといらいらしてくらあ。ああ、ありがとうございます、
ありがとうございます。おや、えらいなあ。おめえんとこじゃあ割り箸をつ

かつてるな。うれしいねえ。割つてある箸や塗り箸なんてのは氣
持ちがわるくつていけねえ。だれがつかつたかわからねえんだ
から・・・うん、それにいいどんぶりをつかつてるねえ。いえ、
世辞をいうわけじゃねえが、二八そば屋でこれだけのどんぶりを
つかつてる店はねえだろうなあ。ものは器で食わせるなんていう
がまつたくだ。中身がうまそうにみえるぜ。・・・うん、この汁
のぐあいがまたなんともいねえじゃねえか。かつぶしをおごつ
たな。夜鷹そばの汁なんてものは、むやみに塩っからいのが多い
もんだが、これだけの汁はなかなかありやあしねえぜ。うん、い
いそばだ。細くて、腰が強く、ぼきぼきしてらあ。ふといそば
なんか食いたくねえや、めしのかわりにそばを食うんじゃねえか
らな・・・うん、いいそばだ・・・そば屋さん、おめえとはつき
あいてえなあ、ちくわを厚く切つたねえ。これでなくつちやちく
わを食つたような気がしねえや。なかなかこう厚く切らねえでう
すく切りやがつてね。齒のあいだにはいるとそれでおしまい。ま
るつきりちくわ食つたような気がしやしねえ。なかには、ちくわ
麩でごまかすやつがいるからひでえじゃねえか・・・うん、うめ
え、まつたくうめえや。もう一ぱいおかわりといいてえんだが、
じつはわきでまずいそばを食つちまつたんだ。まあ、おめえんと
こで口なおしをやつたつてわけだ。すまねえが、きょうんとこ
ろは一ぱいでかんべんしといてくんねえ」

「いいえ、もう結構でございます」

「いくらだい？」

「十六文いただきます」

「小銭だから、間違えるといけねえや。手をだしてくんねえ。勘
定してわたすから・・・」

「では、これへいただきます」

「いいかい、それ・・・ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつ
つ、むつつ、ななつ、やつつ、何時だい？」

「へえ、九刻（ここのつ）で」

「とお、十一、十二、十三、十四、十五、十六だ。あばよ」

勘定をはらつて、すーつといつちまいました。これをかげでき
いておりましたのが、世のなかをついでに生きてるようなぼーつ

るぜ。器がいいということは・・・あれ、きたねえどんぶりだねえ、ひびだらけだ。それにまわりがよくもまあこうまんべんなく欠けたもんだ。これなら、どんぶりにも、のこぎりにもつかえるつてもんだ。大工はよろこぶぜ。まあ、どんぶりなんざあどうでもいいや。べつにどんぶりを食おうつてんじやねえんだから・・・おめえんとこじやあかつぶしおごったねな、汁のぐあいが・・・うーん、塩っからい、湯をうめてくんねえ・・・こ湯をうめればいいぐあいだ・・・汁はまあいいとして、そばにとりかろう・・・ねえ、ふといそばは食いたくねえね、そばはほそいほうが・・・おい、これがそばか？ふといねえこれは・・・まあ、ふといほうがいいや、食いでがあつて・・・こうやつて食うと、腰が強くて、ぼきぼきしてねえや・・・うーん、ぐちゃぐちゃしてらあ、ずいぶんやわらけえそばだね。もつとも、このほうがこなれがいいけどもね・・・こんどはちくわといくか・・・おめえんとこじやあ、ちくわをずいぶん厚く・・・いや、こいつあうすいや、歯のあいだへはいつておしまい、まあ、それにしても麩をつかわねえだけいい・・・麩なんて病人の食い物だ。麩なんか食いたくねえ・・・そこへいくと、あれ、本の麩だ・・・まあこのほうが噛む世話がなくていいや・・・うーん、もうよそう。おい、いくらだい？」

「へえ、ありがとうございます。十六文でございます」

「小銭だから、まちがえるといけねえや。手をだしてくんねえ。勘定してわたすから・・・」

「じゃあいいかい・・・ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつつ、むつつ、ななつ、やつつ、いまなんどきだい？」

「へえ、四刻（よつ）で」

「いつつ、むつつ、ななつ、やつつ・・・」

目黒のさんま

むかしのお大名というものは、下々の庶民生活などご存知ありません。ですから、すこしでもそれを知りたいとおもつて、ご登城の途中、お駕籠のなかで、なにかめずらしいものはないかと、きよるきよるとさがしていらつしやいます。すると、聞こえてまいましたのが、職人たちのななし声で・・・

「おう、聞いたかい、きよるの米相場を・・・」

「いや、まだ聞かねえ」

「でえぶ暮らしがよくなつたじゃねえか。両に五斗五升だ」とよそれをお駕籠のなかでお聞きになつた大名が、

「ほう、米は両に五斗五升か、おそらくこんなことを知っている大名はあるまい。これはよいことを聞いた」

と得意になつてご登城になり、

「いや、おのおのがた、大きに遅刻いたしました」

「おや、おはようござる。さあ、これへおいでなされ・・・いかがでござる。なにかかわつたことでもございましたかな？」

「さよう、今日の米相場をお聞きになられましたか？」

「いや、うけたまわらん」

「さようか、町人どもはだいが暮らしがよく相成り申した。なにしろ、両に五斗五升でござるからな」

「貴公には、いつもながら下世話におくわしいが、米相場までご存知とは、いやはおどろきいっただい。して、ただいま、両に五斗五升とおおせられました、いったい、両とは何両のこととござるな？」

「うむ、それはむろん百両でござる」

十両盗めば首がとぶといわれた時代に、そんな高い米はござりません。

秋の一日、あるお大名が、ご家来を十二、三人おつれになつて、遠乗りにおでかけになりました。

昼近くになつて、そのころは、まだ江戸の郊外だった目黒まで

乗りつけられて、

「一同の者、おもったよりもはやくまいったな」

「ははあ・・・おそれながら、お上のお腕前には、いまさらながら驚嘆つかまつりました」

「さようか・・・なんにいたせ、よい景色じゃ。落ち葉といい、もみじといい、まことにみごとな風情じゃな」

「御意にございます」

「ときに、最前より馬上においてかんがえておったが、戦場にのぞんで難戦の折りなどには、馬にばかり乗っておられん。さような場合は、徒歩となるであろうが、そのときには、足が達者でなければ、ものの役にはたたん。じゃによって、これから足をためしたいとおもうが、どうじゃ？」

「おそれながら、いかにしてお足をおためしに相成りますか？」

「そのほうどもと走りくらべをする。予に勝った者にはほうびをとらせるが、負けた者は、屋敷へ帰って鉄扇でかしらを打つがどうじゃ？」

「へへー、ありがたきあわせ・・・」

負ければ、鉄扇であたまをなぐられるというのに、「ありがたきあわせ」というのもまぬけなはなしですが、ご主君のいうことにはさからえませんか、これから走りくらべということになりました。

殿さまは、陣笠をおとりになると、ぱっと走りだされましたが、なにしろお年若でございますから、なかなか足もお達者で、脇目もふらずどんどんどん走っておいでになります。

「いや、ご同役、殿のお達者なおどろき申したな。このようすでは、ごほうびにありつそうもありませんな」

「さよう、鉄扇のほうに近くなってきましたぞ」

「まことに情けないことで・・・やあ、殿には、あすこでおとどまりになって、ふりかえってみておいでなさる。はやくまいろう」

「ご家来衆がやってみますと、殿さまは、すぐに杉の切り株に腰をかけておやすみになっていらつしやいます。」

「おそいではないか」

「どうもおおそれいました」

「ここは、なんと申すところじゃ？」

「上目黒元富士と申しまして、目黒より二十四丁ほどはいりましてでございます」

「なんじゃ、たった二十四丁か。予は一里も走ったような気がいたした。わずかに二十四丁ぐらいで、かように息が切れるようなことでは、いざというときに、ものの役に立たん。ご難戦の折には、神君も十里の道を走り通されたとうけたまわっておるが、泰平の大名は役に立たん。まことに汗顔のいたりじゃ。そのほうどもにいたっては論外じゃ」

「うへー、おそれいりましてでございます」

「ときに、だいぶ空腹をおぼえてまいった・・・いづれかで魚を焼いておるようじゃな」

「御意の通りでございます。いづれかで魚を焼いておるよう

で・・・」

ご空腹は殿様ばかりではありません。ご家来衆もおなじこと

で・・・

「ご同役、さんまを焼いておりますな」

「かような腹べこの折にはさんま一膳茶づりたいもので・・・」

このひそひそばなしが、殿さまの耳に入りました。

「これよ」

「ははっ」

「そちらの両名の者、ただいまなんとか申しておったな、腹べこの折には、さんまでも茶づりたいとか・・・なんのことじゃ？」

「うへー、とんだことがお耳にとまりました、んんとも申しわけございません」

「これこれ、さようないいわけは無用じゃ。本日は、無礼講であるから、わけを聞かしてくれ」

「しからば申しあげます。下々では、空腹のことを腹ぺこと申しております」

「ほう、空腹が腹ぺこか、おもしろいことを申すな。しからば、

さんまで茶づるとはなんのことじゃ」

「さんまとは、魚の名でございます」

「はて、予は一度も食したことがないぞ」

「はあ、下魚でございますゆえ、お上のお口にはいりますような魚ではございませんが、ただいまのような秋の季節には、ことのほか風味のよろしいものにございます。かように空腹の折に、さんまで一膳茶漬けを食したいと申しますのを、腹へこの折には、さんまで一膳茶漬りたいと申したのでございます」

「ああさようか。予も腹へこじや。さんまで一膳茶漬りたい。さつそくしたくいたせ」

「はあ、ただいま用意いたします」

「ご家来衆、ひきうけて御前をさがったものの、どうしてよいかわかりません」

「ご同役、こまりましたな。さんまをもとめようにも、このあたりには魚屋もなし・・・」

「さよう・・・うん、よろしゅうござる。さんまを焼いておる家へまいつて、たのんでみましょう」

「それは妙案」

「ご家来衆が一軒の農家にまいりますと、おじいさんがしきりにさんまを焼いておりましたが、ちょうど脂が乗りきっているので、うちじゅう一ぱいの煙り」

「ゆるせよ」

「おいでなせえまし・・・なにかご用で？」

「余の儀ではないが、われわれのご主君が、そのほうの家で焼いておるさんまのおいをおかぎあそばして、一膳食したいとおっしゃるによつて、さつそく膳部のしたくをいたせ」

「なんでござえます？ちつともわかかんねえだ」

「わからんやつじゃな。われわれの殿さまが、そのほうの家で焼いておるさんまのおいをおかぎになり、ごはんをめしあがりたいたとおっしゃるから、すぐにしたくをしろというのじゃ」

「はあ、それではなにかね。わしのところで焼いているさんまがうまそうだから、めしを食わせろというのかね。そりやあ、いくら殿さまだつて虫がよすぎるだ。わしが食うべえとおもうから、はるばる品川まで買いにいつてきただ。それをいきなりやつてきて食わせろなんて・・・おことわりしますべえ。みず知らずのかたに、一膳だつてめしをこちそうするいわれはねえ」

「これこれ、無礼なことを申すな。そのほうの家のものをめしあがつて、ただお帰りになる気づかいはない。きつと多分のお手当てをくださるぞ。第一とうといご身分のおかたが、そのほうどもなどにおいて食事をあそばすということは名譽なことではないか」

「まあ、お断り申しますべえ。わしがとこはめし屋でねえから、めしを食わして手当てなんぞいたただきたくねえだからね・・・」

このやりとりを門口で聞いていらしたお殿さま、にこにこ笑いながら、なかへおはいりになって、

「これゆるせよ」

「へー、おいでなせえまし・・・これは殿さまでござえますか？」

「さようじゃ。ただいまあれにて聞いておつたが、この者の申しようが、そちの氣にさわつて、だいぶ立腹のようすじゃが、ゆるしてくれよ。ことごとく空腹にて、まことに難渋いたす。どうか一ぜん食事をさせてくれぬか？」

「へえへえ、こりやあ感心しました。えれえな、やつぱり殿さまはたいしたもんだ。口のききかたからしてちがわあ。そこへいくとこの野郎だ。口のききようを知らねえばか野郎だ」

「おのれ、ばか野郎とはなんだ」

「これこれ、おこるでない。それにちがいないではないか」

「どうもおそれいましてございます」

「それじゃあ、殿さまのおっしゃりようがうれしいから、ふるまつてくれべえかね」

殿さまは、生まれてはじめてさんまをめしあがりましたが、空腹のところへもつてきて、しゅんのさんまですから、たいそう御意になつて、

「これはすこぶる珍味なものじゃ。十分に手当てをしてとらせいで過分のお手あてをくだされて、お屋敷へおもどりになりましたが、目黒でめしあがつたさんまの味がわすれられません。しかし、殿さまのご膳部には、もちろんさんまなどでまいりますから、毎日、さんま、さんまと恋いこがれておりました」

ある日のこと、殿さまが、ご親戚へおよばれでおでかけになりますと、「なにかお好みのお料理はございませんでしようか。なんなりとお申しつけくださいまし」というご家老の申しいでご

「さいますから、殿さま、待ってましたとばかり・・・」
 「さようか、しからば、腹ペこの折りから、さんまで茶づりたいぞ」

「うへー、心得ましてございます」
 心得ましたとご前をさがってきたものの、ご家老にも、なんのことやらさっぱりわけがわかりません。そこで、さっそく重役一同をあつめて、

「さて、おのおのがた、本日おあつまりねがったは余の儀ではない。じつは、ただいま、ご分家の殿より、腹ペこの折りからさんまで茶づりたいとおことばがあつたが、おのおのがたは、いかなることかおわかりでござるかな？」

「はて、とんとわかり申さぬ」

「てまえにもなんのことやら・・・」

「てまえにも見当がつき申さぬ」

「てまえも・・・」

だれにもわかりません。それでは、家中のうちにはわかる者もあるであろうというので、ご家中へさっそくお触れができました。

腹ペこの折りから、さんまで茶づりたいことをわきまえる者あらば、ただちに申しいでよ。恩賞の沙汰におよぶという大げさなお触れ書きで・・・

ところが、これを見まして、中間部屋の連中はみんな腹を抱えて笑っております。だんだんしらべてみると、事情がわかりましたので、さっそく日本橋魚河岸から最上等のさんまをとりよせたのですが、このように脂の多いものをさしあげて、もしもおからだにさわっては一大事というので、十分に蒸して、小骨なんかは毛抜きでぬいて、さんまのだしがらみたいなのをこしらえあげました。

「殿、ご注文のさんまでございます。なにとぞご正味くださいまし」

「なに、これがさんまと申すか。ばかに白いではないか。まちがいではないのか？ たしかもつと黒くこげておったはずじゃが・・・」

「いいえ、さんまに相違ございません」

「さようか、どれどれ・・・」

殿さまが、箸でおとりになると、ぷーんとかすかにさんまのおいがしておりますから、

「うーん、このにおいはまさしくさんまじゃ。これ、さんまよ、恋しかつたぞ」

殿さま、感涙にむさんでーと口めしあがったのですが、蒸して脂がぬいてあるばさばさのさんまですから、どうしたっておいしいはずはありません。

「これがさんまか？」

「御意」

「ふーん・・・して、このさんま、いづれよりとりよせたのじや？」

「ははあ、日本橋魚河岸でございます」

「あつ、それはいかん。さんまは目黒にかぎる」

なめる

江戸時代のおわりごろには、猿若町に、中村座、市村座、川原崎座のいわゆる三座というものがありまして、折からの顔見世興行で、どこもいっぱいの入りでございます。

「いらっしやいませ。ええ、せんだつてはありがとうございますございませう。へえー、きょうはご見物でございますか？」

「見物してえんだが・・・」

「まことにどうもお気の毒さまでございます。じつは、どこももういっぱいでございまして・・・まことにお気の毒さまで・・・二、三日前になんとかおっしゃってくだされば、よろしいところをとっておきましたのに・・・どうもきょうのところは・・・」

「そんなこといわねえで、いつもこうやってきてるなじみじゃねえか。どうにかしてくんねえな。近けえうちにはじめからみにくるが、きょうは近所へきたから、そのついでに、ちよつと一幕、あんまり景気がいいから、たつた一幕でいい。どんなところでも立っていてもいいのだから、なんとかしてくんねえ」

「こまりましたな。ちよつとお待ちください。じゃあ、こうあそばせ、こつちへいらっしやい」

鶉のうしろというところへ案内しまして、
「そのうちにどっかよいところがあきましたらおよびしますから、しばらくここにいらっしやいください」

「ここで結構だよ。用があつたらよぶから・・・」

「どうか、そこでご辛抱を・・・いずれあきましたら・・・」

「ああ、ありがとう・・・いやあ、たいそうっへえつたな。いい景気だ。音羽屋！音羽屋！」

と大きな声で、音羽屋、音羽屋と夢中でほめておきますと、その男の立っておりますすぐ前の客は、十八、九のきれいなお嬢さんと二十四、五のおつきの女中らしいふたりづれでマスをとってすわっておりますが、うしろであまり大きな声があるのでふりむいて、

「まあ、お嬢さま、うしろにいらっしやるかたが、音羽屋をほめ

てくださいますよ・・・あなた、まあ、おつかれでございませう」

「え？いえ、どうもおおそれいりました。あたまの上で、があがあどなりまして、どうもおお気の毒さまで」

「いいえ、お嬢さまも、あたくしも音羽屋がひいきでございませうから、音羽屋をほめていただきますと、まことにうれしゅうございませう」

「えっ、あなたがたも音羽屋びいきで？へえ、よござんすね、これだけの役者てえものはなかなかありませんからね。音羽屋！」

「あなた、こちらへおはいりあそばしては・・・」

「え？そのマスへでござんすか？だつて、おつれさまがいらっしやるんでござんしよ？」

「いいえ、ふたりつきりで、あいておりますから、どうぞご遠慮なさらないで・・・」

「えっ、さようですか。じゃあ、すみのほうをちよいと拝借いたしましたして、えへへへ」

「どうぞ、どうぞおはいりあそばして・・・そのかわりと申してはなんでございませうけれど、よいところへまいりましたら、音羽屋をほめていただきとう存じます」

「へえ、おやすいご用で・・・まあ、ほかにお礼のいたしようにございませんから、ほめるほうで十分につとめさせていただきますやしょう。では、さつそく・・・音羽屋！」

「ありがとうございます」

「いえ、どういたしまして・・・音羽屋！」

「ありがとうございます」

「いえ、いちいち礼なんぞおっしゃらなくてもようござんす。あつしも好きでほめてるんですから・・・音羽屋！音羽屋！ねえ、まつたくよござんすね。音羽屋！音羽屋！」

「あなた、もう幕がしまつております」

「ああ、なるほど、しまつておりますな。えへへ、ついでに幕のほうもほめておきましょう。幕！」

「まあ、おもしろいことをおっしゃいまして・・・あのう、お弁当がきておりますから、ちようどいい時分でございますから、も

「しおよろしければいかがでございますか？」

「へえ？なんでござんす？お弁当を、てまえに？．．．いえ、もう腹はいいんで．．．もうたくさんで．．．」

「いいじゃございませんか。お若いですが、お弁当のひとつやそこら．．．」

「へえ、さいですか．．．そうおっしゃってくださいと．．．へえ、じゃあ、おことばに甘えましてちょうだいいたします。どうもすみませんでござんす。こりやあどうも結構なお弁当で．．．こりや、うめえ．．．あつ、幕があきました。あつ、でてきました。音羽屋！うめえぞ！」

「役者がうまいんだか、弁当がうまいんだかわかりません。めしを類ばったままでほめるから、前の人のあたまは、めしつづぶだらけになってしまふというたいへんなさわぎ．．．」

「あのう、あなた、お茶をめしあがつて．．．」

「へえ、どうも、こりやあ、ごちそうさまで．．．」

「ときに、つかぬことをうかがいますが、あのう、あなたはおいしくでございますの？」

「へえ、なんでござんす？」

「いえ、あの、あなたのお年齢（とし）は、おいくつでいらつしやいますの？」

「え？あつしの年齢でござんすか？へへへ、べつにいくつってえほどのもんじゃあねえんで．．．」

「まあ、いくつというほどのもんじゃやないなんて．．．お年齢がないってことはありますまい」

「いえ、そりやあ、年齢はあるにはありますが、つまり、その、これがしよのねえもんで、二十二なんで、ことしが二十二で、首尾よくいきやあ、来年は二十三になる見当なんで．．．」

「まあ、あたりまえじゃございませんか。ほほほほ．．．でも、二十二とはいい年まわりでございませうわ。ねえ、お嬢さま．．．ちようどぴったりの年まわりで．．．」

「へえ、さいですか。いいか、わりいか、二十二は掛け値のねえところなんで．．．」

「まあ、ほほほほ．．．」

「ときに、お嬢さまのお宅はどちらでいらつしやいますか？」

「あのう、すこし遠いんでございますが、いま、ちよつとおかげんがわるくて、業平の寮へいらしつておりますので．．．」

「へえ業平でござんすか、それじゃあ目と鼻のさきでござんすね」「そうでございますよ。ちようどご運動のためにお歩きになるには、まことに手ごろな道のりでございますの」

「へえ、もしお歩きになってお帰りならば、あつしがお送り申しませうか？」

「もしそうねがえれば、ほんとうにたすかりますわ。いま、女ふたりでは、気味がわるいので、お駕籠をそういおうとしておりましたところ．．．」

「いいえ、そんなことすることはござんせんや。お送りいたします。へえ、はねましたらさつそく．．．」

「芝居がはねたあとで、男は、業平まで送ってまいりましたが、芝居小屋にいたときからずっときれいなお嬢さんのそばにつきつきりなので、男はいささかほーつと上気しておりますから、十一月の夜風もかえつてころよいくらいで．．．」

「まあ、ありがとうございます。あなたにおはなしをうかがいながらまいりましたので、道のはやかったこと、もう帰ってまいりましたのわ」

「へえ、こちらさまで．．．きれいなお宅でござんすね。さだめし多勢さまでお住まいでござんしょうね」

「いえ、それが、お下のほうの女中は五人ほどおりますが、奥はわたくしとお嬢さまとふたりつきりでございますので、それはもうさびしいんでございますよ」

「へえ、たったおふたりで．．．ええ、あつしはこれくらいで失礼させていただきます」

「あら、よろしいではございませんの。せめてお茶の一ぱいなりとめしあがつて、もし、おそいようでございましたら、てまえどもにお泊まりになつてもよろしいのでございませう？ねえ、お嬢さま。さあ、あなた、そうあそばせよ。もし、ご都合で、どうぞてまえどもにお泊まりあそばして、ねえ、もし．．．」

「へえ、そりやあ、もう、えへん．．．」

「あら、あなた、なにをしていらっしやいますの？まあ、いやですよ。そっちをむいて、眉へつばきなんぞおつけになつて・・・このへんに狐なんぞおりませんよ。まあ、そんなごじょうだんをなさらずに、さあ、どうぞおはいりくださいましな」

「へえ、さいですか、では、ごめんをこうむつて・・・」

夢に夢見る心地の男は、すすめられるままにありがとうございます、奥の結構な十二畳の座敷へ通されました。

「さあどうぞ、あなた、こちらへおすわりあそばして・・・まあ、いろいろとお世話をおかけいたしましたして、どうもありがとうございます。もうお嬢さまがたいそうおよろこびでございまして、ただいまおめしかえをなすつて、ごあいさつにでていらっしやいますから、いましばらくお待ちくださいまし」

「いえ、もう・・・そのお礼は、こつちで申さねばならねえんで・・・もうおかまいなく・・・」

「では、ちよつとお待ちあそばして・・・」

案内の女中といれちがいにはいつてきたお嬢さんの姿をみて、男はその美しさにいまさらながら息をのみました。と申しますのは、芝居見物のときの友禅模様とちがひまして、黄八丈のお召しに繡珍の帯を胸高にしめ、髪は文金の高島田で、すこし病みつかれたその細おもては、青白くすき通るようで、ぞつとするような美しさでございまして。折からの寒さも手つだいまして、男はぞつとしてしまいました。

「へえ、どうも、きょうはたいへんごちそうになりました・・・どうも、まことにはや・・・」

「いいえ、あたくしのほうこそたいへんご厄介になりました・・・きみや、きみや」

「はい、ただいま・・・お嬢さま、なにかと存じましたが、なにもございませんで・・・ねえ、あなた、なにもございませんが、お茶屋から持つてまいりましたお煮しめで、どうかひとつめしあがつてくださいます。さあ、お嬢さま、お酌をあそばして・・・」

「へっ、お酒を？そんな、あなた、ごちそうになりましたは・・・へえ、さいですか、へへへ、どうも・・・いいお酒で・・・いいえ、さかななんぞ・・・へ、さいですか。では、これをこういた

だいて・・・」

「さあ、もうひとつ・・・まあ、よろしいではございませんか」「いいえ、もう結構で・・・いいえ、もう・・・さいですか。しかし、こうやって酒をいただいておりますと、なんだか夢のようで・・・」

男は夢中でさかすきをうけておりますうちに、いつのまにか女中もいなくなりまして、あとはお嬢さんとさしむかいということになりました。

「あのう、あなたさまにおねがいがございます」

「おねがい？なんでござんす？もう、お嬢さんのためなら、命でもなんでもさしあげます」

「ほんとうでございすか？」

「ええ、うそなんぞ申すもんですか。なんなら手つけに目をまわしましょうか？」

「まあ、ごじょうだんを・・・でも、申しあげて、おいやとおっしゃると・・・」

「いやだなんぞと申すもんですか。命までさしあげるというくらいなんですから・・・はやくおっしゃってください。そのねがいというのを・・・」

「では、きつとわたしのねがいをかなえてくださいますね」

「そりやもうかならず・・・」

「それでは申しあげますが・・・あの・・・」

「へえ・・・」

「じつは、あたくしの・・・あのう・・・お乳をなめていただきたいのでございます」

「え？お嬢さまのお乳を？・・・へえ・・・あのオツパイをでござんすか？このあつしが・・・うふふふ」

「まあ、そんなふうにお笑いになつて・・・あたくし、恥ずかしい」

「お嬢さまのお乳をなめるなんて、もう、あつしや死んでも本望で・・・」

「では、ほんとうにおひきうけくださるようですから申しあげますが、じつは、あたくし、お乳の下におできができております。

それを、あなた、なめてはくたさいませんか？」

「ああ、そうですね．．．おできをね．．．どうもはなしがうますぎるとおもった」

「命までもくださるとおっしゃったのですもの、よもやいやとはおっしゃいますまいねえ」

「なめます。なめますよ。しかし、それだけなんで？」

「いいえ、そんなことをしていただきました上は、あたくしのよな者でもかわいがってくださいますなら、一生あ

なたのおそばで．．．」

「えっ、ほんとうですか？さあさあ、そうときまれば、おだしなさい。おできをどんどんおだしなさい。いくらでもなめちまいますから．．．」

お嬢さんもこうなるといっしょうけんめいでございます。まっ赤になって、おもいきって着物をひらきます。下は燃えたつような長襦袢で、その下に、蒼味がかった白い肌があやしくかがやいているのを見て、男はおもわず息をのみました。いままでは、できものをつつんで、麝香かなんかでおいもかくしておりました。が、着物の前をひらきましたので、そのにおいももれて、乳房の下が紫色に大きくはれあがって、うみがでて．．．そのものすごいこと．．．さすがの男もひるむとみましたから、お嬢さんもけんめいになって．．．

「あなた！」

「とほほほ」

と、目をつぶって、こわごわ前へでる男を力まかせにひいたからたまりません。もろにおできをなめてしまいました。

「むう、むう．．．」

「なんでございます？」

「むう、むう」

「ああ、お顔をお洗いになるのです．．．では、どうぞこちらへおいでになって．．．」

口をゆすぎおわって、また酒になりました。

「どうも、この、今夜はすっかりおそくなっちまいましたんで、こちらさまへ泊めていただいで．．．へへへ．．．」

「さあ、おあついとところをおひとつ．．．」

「へへへ．．．お嬢さまが、お酌してくださるんで．．．こりや、またきれいなお手手で．．．やわらかくて、すべすべして．．．うふふふ」

「まあ、ちよっとおはなしになって．．．お酌ができませんから．．．」

「お酌なんざあ、いつでもできませあ．．．今夜はこちらへ泊めていただいで、あなたと、その．．．へへへ．．．」

「まあ、手をおはなしてくださいまし」

「手ぐれえ、どうってこたあござんすまい。夫婦になれば、どこもかしこも、みんなあつしのもんになるんでござんすから．．．」

「あれ、おやめくださいまし。おゆるしを．．．」

「およしもおゆるしもねえ、お嬢さま、へへへ．．．このやわらかい玉の肌を．．．」

とたんに、ドンドンドン．．．玄關の戸がわれるばかりにたたかれました、女中がまっ青になってとんでまいりました。

「たいへんでございます。叔父さんがいらっしやいました」

「叔父さん？なんでござんす、その叔父さんてえのは？」

「いいえ、たいへんな酒乱で、すぐに刃物をふりまわしてあべれます。女ばかりのところへなげ男がいるんだと、このあいだも、出入りの呉服屋の番頭さんが、あやうく怪我するところでした。あなたもこんなところをみられたら、どうなるかわかりません。」

すぐに裏口からお逃げになって、また、明日おいでくださいまし」

「そりやあ、たいへんだ」

「裏のほうへ履物をまわしておきましたから、そちらへどうぞ．．．ああ、そこにどぶがございますから、お気をつけて．．．

あら、まあ、どぶにおちて、あなた、たいへんなことを．．．」

「いいえ、もう命にはかえられません」

泡をくった男は、命からがらはだして逃げ帰りました。

夜があげますと、きょうは、天下晴れて花婿になれるってんで、男は、風呂屋と床屋をかけもちして、すっかりみがきあげると、すっかり上きげんで、

「こう、どうでえ。こうやってめかしこんでいくと、女がなんて

いうだろうな。『ゆうべは、とんだじゃまがはいりまして申しわけございません』かなんかいうのを、おれがおわりまでいわせないよ。肩をぐつと抱くつてえと、このくちびるで、くちびるにふたをするつてやつた。うふふふ、たまらねえ」

「どうしたんだろう？あの野郎、ひとりでにやにやしなから歩いてやがら。おう、おう、どうしたい、兄弟！」

「よう。うふふふ。うふふふ。」

「なんでえ、気持ちがわりいな。こんちくしょう」

「だって、おめえ、うふふふ。さる大家のお嬢さまが。うふふ。まあ、いっしょにこいよ」

「なに？お嬢さまがどうしたんだい？はつきりいえやい」

「お嬢さまが、おれをみそめたんだ」

「おや、はつきりいやあがつたな。しかし、おめえをみそめるな

んざあ、とんだ茶人じゃねえか。どうせおたふくなんだろう。ええ、おかちめんこだろうな」

「いいや、それがいい女だって。あのくれえいい女はみたこと

がねえや」

「ふうん、それがどうしておめえと？」

「きのう、おれが芝居にいつて、ちよいと口をきいたのがきつかけ

というやつさ。それから寮まで送つて、一ぱいごちそうになつて、いざつてときになつてじゃまがはいつたんで、きょうはあら

ためてお床いりつてわけだ」

「ほんとかい？そりゃあ。」

「ほんとだとも。おめえとしゃべりながらきたんで、もう着

いちまった。ここだよ、この家だよ」

「だって、おめえ、びつたりしまつて、なんだか空家みてえじゃ

ねえか」

「そんなことがあるもんか。きつと戸じめで買い物なんかにい

つたんだよ。ちよいと待ちねえ。となりのたばこ屋で聞いてみる

から。ええ、こんちわ」

「なんでございますか？」

「おとなりは、どこかへおでかけでござんしようか？」

「ああ、となりは。あなた、お出入りのかたでいらつしやい

ますか？」

「へ？まあ、お出入りみてえなもんで。いまきてみましたら、

びつたりとしまつておりますんで、どうしたのかとおもいまし

て。まあ、お出入りのかたならおはなししますが、まあ、こちらへ

どうぞ。うふふふ。うふふふ」

「へえ、どういたしたんで？」

「いいえね、世の中にはね、ばかな野郎もあるもんだと、ゆうべ

から笑いつづけなんですがね。というのも、あのお嬢さまのおで

き、どんな医者にみせてもなおらない。で、ある易者のいうには、

お嬢さんよりも四つ年上の、二十二の男になめてもらえばなおる

つてんで、そんな男をさがしていた。ところが、きのう、芝居小

屋で、二十二の手ごろなばか野郎を生け捕つた」

「へええ？へえ」

「ところが、そいつが、色深い上にずうずうしいときているから、

のこのこと、ここまでついてきたそうさ。そこで、座敷へ通して、

一ぱい飲まして、お嬢さまとさしむかひになつたところで、あな

たに折りいつておねがいがあるつていつたら、その野郎、のりだ

しゃがつて、あなたのためなら命でもなんでもさしあげるつてい

つたそうさだ」

「へえ、へえ。すると、野郎、ずうずうしく泊まつてゆくかなんかいだした。

泊まつていかれちゃあたひへんだんで、女中さんがうちへとん

できたから、あたしが酒乱の叔父さんの役になつて、玄関をドン

ドンたたくと、野郎、横つとびに逃げだして、おまけにどぶにま

でおつこちやあめんどつたんで、ゆうべのうちにすっかり荷

物をまとめてひっこしたというわけなのさ」

「へえ。これで、お嬢さまのご病氣は、まもなくご全快つてんで、たい

そうなおよろこびだが、かわいそうなのは、そのなめたばか野郎

よ」

「へえ？いつたい、どうなるんで？」

「なにしろひどい毒だ。あれをなめちゃあ七日と生きられめえと

いうことだ」

「うーん」

「おや、しょうがねえな。こりやあ、はなしをしたら、ひっくり
けえちやった。はなしでんかんかな？よわったな、どうも・・・
おい、ちよいとおまえさん、そこに立ってる人、おまえさん、こ
の人のおつれじゃないのかい？」

「つれじゃねえんで、ただ、いつしよにきただけなんで・・・」

「それじゃあ、やっぱりつれじゃねえか。くだらねえことをいっ
てねえで、はやく、おまえさん、介抱してやっておくれ」

「しょうがねえなあ、どうも・・・おい、だらしがねえぞ。おい、
八公！おい、しっかりしなよ、八公！八公！おう、いいあんべえ
に、旦那、気がつきました」

「そりやあ、よかった。うちになんか薬があるといいんだが、あ
いにくどうも・・・よわったなあ・・・」

「いいえ、薬なら、ちよどうぞよそへとどける宝丹があるん
で・・・」

「そりやあいいや、いい気つけ薬を持っていて・・・はやくのま
せておやんなさい」

「では、さっそく・・・さあ、八公、おい、薬だよ。宝丹だ。宝
丹をはやくなめなよ」

「ううん、なめるのはこりこりだ」

転失気（てんしき）

おならというものはたいへんに愛嬌のあるもので、とかくお笑
いの種になります。

川柳なんかみましても、その季節ごとにずいぶんおかしいのが
あるようで・・・

「馬の屁にころりと落ちた玉椿」これは春のおならで、「音も香
も空へぬけてく田植の屁」これは夏のおなら、「ごめんごめんと
芋食いすぎて今日の月」これは秋のおならで、「こたつから猫も
あきれて顔をだし」これは冬ですが、なるほど、猫だつてこたつ
のなかでおとされてはたまつたもんじゃありません。

ある寺の住職がぐあいがるいので、お医者さまがまいりまし
た。

あれこれと診察をしたあとで、
「ちとこれはお腹が張っておりますな。いかがですか、転失気
はありますか？」

と聞いたのですが、この住職がいたって負けおしみの強い人で、
わからないということがいえません。

「はい、てんしきでございますか」

「ありませんか」

「いえ、ないこともございません」

「はあ・・・とにかく薬をとりにおよこしなさい。たいしたこと
もないからご心配にはおよびません」

「それはありますがどう存じます。ただいまお薬をいただきにつかわ
します。どうもご苦労さまでございました」

医者が帰ると、小坊主をよんで、

「珍念や」

「へえ」

「おまえはな」

「へえ」

「てんしきというものを知っているか？」

「いいえ存じません」
 「知らんではいかん。もうおまえも十三ではないか。そんなことではいかんな」
 「あの・・和尚さん、てんしきというのは何でございます？」
 「わしが教えては氣にゆるみがあつていかん。前の花屋へでもいつて、てんしきというものをみてきなさい」
 「へえ、かしこまりました。・・なんだろうな、てんしきてえものは・・」
 珍念が門前の花屋へまいりまして、
 「こんちわ」
 「おや珍念さん、なにかご用かね」
 「あのう・・こちらになにがありますか・・その・・てんしきが？」
 「え？てんしき？」
 「ありませんか？」
 「いや、そのう・・ないこともなかったが、先月、ねずみが柵からおつことしてこわしてしまつた」
 「へえ、そうでございますか。よわつたなあ、じゃありませんね」
 「ああ、あいにくとな」
 「そんなら和尚さまに素晴らしいです。さようなら・・えー、和尚さま、いつてまいりました」
 「あつたか？」
 「いいえ、先月、ねずみが柵からおつことしてこわしてしまつたそうで・・」
 「そうか、それはいけないな。ともかくちよつとお医者さまへいつてきておくれ」
 「へえ、和尚さま、てんしきというものはなんでございます？」
 「わからんやつじゃ。さつきもいう通り、わしがおまえに教えるとすぐにわすれてしまふ。いつでも和尚さんに教われればいいという、氣にゆるみがあるからいけない。ちよつどさいわいだから、お医者さまへいつたら、わしがいつたといわんで、おまえの心からでたようにして聞いてみなさい」

「へえ」
 「すぐにいつておいで」
 「へえ、いつてまいります・・うーん、てんしき、てんしき・・いつたいなんのことなんだろうな、聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥というから、先生のところへいつて聞いてみよう・・おたのみ申します」
 「どーれ・・おや、だれかとおもつたら、お寺の小僧さんか。さあさあ、こつちへおあがり」
 「えー、先生」
 「なんだな」
 「あのう、つかぬことをうかがいますが、さつき和尚さまにてんしきがあるかとおっしゃいましたね」
 「うむ」
 「わたくしはてんしきというものを存じませんが、どんなものでございますか？」
 「ああ、おまえは感心な小僧さんじゃ。知らんことを聞くに恥はない。わからんことはなんでも聞いておぼえておきなさい。あれはな、おならのことだ」
 「へえー、おなら・・あの、お尻からでる」
 「そうじゃ」
 「へえー、おならのことがてんしきでございますか。それでございませうか、へえー」
 「ひどく感心しているな。『傷寒論』という本に、氣を転（まる）しめ失うとある。これすなわち転失氣だ。よくおぼえておきなさい」
 「ありがとうございます」
 「では藥を調合してあげる。これを持っていつて煎じてあげなさい」
 「へえ、さようなら・・あははは、これはおもしろいや。和尚さんはしらないもんだから、ねずみが柵からおつことしてこわしてしまつたなんていつたんだ。おならをねずみが柵からおつことすやつがあるもんか。あのおじさんも知つたふりをして知らないんだ。でも、先生から聞いた通りに和尚さんにいつちまつちやあおもしろ

くないな。なんとかいいようがありそうなもんだな。転失気、転失気と・・ああ、あるある。そうだ。なんだといったら、さかづきのことだそうでございますと、和尚さんをだましてやるう・・えー、行ってまいりました」

「ああごくろう、ごくろう。どうした、てんしきをきいてきたか？」

「なんだといった？」

「あのう、おさかづきのことだそうで・・」

「なに、さかづき？・・うむ、そうじゃ、さかづき、さかづき、よくおぼえておけ。酒を呑む器、つまり呑酒器と書くのだ。これからは、来客のとき、呑酒器を持っていったら、さかづきを持つてこいよ」

「へへへへへ」

「なにを笑ってる。それだからものがおぼえられないのだ。いいから、あっちへ行ってろ」

さて、その翌日になりますと、お医者さまがまた診察にみえました。

「お住持、ぐあいはいかがですか？」

「だいが気分もよろしいようで・・ときに先生、きのう呑酒器があるかとおたずねでございましたな」

「はあ、はあ」

「その節ないように申しましたが、じつはございました」

「それは結構なことだ・・」

「なんならひとつごらんにいれましょうか」

「いや、それにはおよびません」

「いや、ぜひともごらんにいれたいもので・・おい、珍念や」

「はい」

「呑酒器を持っておいで」

「ふふふふ」

「なにを笑っている。すぐに持っておいで、いいか、三つ組のほうの呑酒器だぞ」

「三つ組の呑酒器ならば、ブーブーブーだ・・へい、和尚さま、持ってまいりました」

「うん、そこへおきなさい・・さあ、先生、これでございます」

「いや、おそれいりました。この桐の箱のふたをあけると、においでもしすかな」

「いや、これはよくふいて、綿につつんでありますから、においなどはいたしません」

「はあ、さようで・・では拝見いたします・・おや、これは

みごとなおさかづきで・・これはいったいどういうこと？」

「どういふことと申して・・いや、それは、愚僧がたいせつに

いたしております呑酒器で・・」

「はあ？異なことをおたずねするようですが、愚老のほうでは

『傷寒論』に、気を転め失うと書き、放屁のことを転失気と申します

が、寺では、さかづきのことをてんしきと申しますか？」

「さよう、さかづきをてんしゆきと申します。」

「このさかづきをかさねますと、しまいにはブーブーがです」